鑑賞文　俳句を楽しむ (2)

B 金亀子擲つ闇の深さかな　　高浜虚子

『虚子全集』

この句の季語は「金亀子」、かなぶんの仲間で夏の季語です。その下の「擲つ」という動詞は、強く投げるという意味です。まずは、この句がどのような場面を詠んだものかを考えてみましょう。

ヒントは「金亀子」という昆虫の習性にあります。こがねむし、かなぶんなどの甲虫は、夜になると灯りを目がけて飛んできます。現代の都会ではちょっと考えられないかもしれませんが、昔はエアコンなどもなく窓を開け放っていましたから、家の中にこがねむしが飛び込んできてしまったのでしょう。作者はそれを捕まえて、窓の外へ強く放り投げた（＝擲った）のです。さあ、その後このこがねむしはどうなったでしょうか。

それを考える上でポイントになるのが、後半の「闇の深さかな」という部分です。もし、放り投げたこがねむしが隣の家の壁にあたって鈍い音を立てたりしたら、「闇の深さ」という把握にはならなかったでしょう。おそらく、このこがねむしは真っ暗な闇の中へすうっと音も立てずに消えていったのではないでしょうか。そこで気付いた夏の夜の「闇の深さ」が、この句における作者の感動の中心なのです。それを表しているのが、句末に置かれた「かな」という切字の働きです。

つまり、「かな」という切字の働きは、「や」のようにそこで意味的に切れることを表すのではなく、「かな」の使われている箇所が一句の感動の中心であることを表すことにあります。また、「や」を使って切った句の多くは「取り合わせ」の句になりますが、虚子のこの句は取り合わせではありません。上五から下五までが一つのフレーズになっていて、「金亀子」のことだけを詠んでいます。このように、季語のことだけを詠んだ句のことを「一物仕立て」と言います。すべての俳句は、「取り合わせ」か「一物仕立て」のどちらかだと考えて差し支えありません。

（中略）

ちなみに、先程の虚子の句を「けり」を使って次のように書き換えたら、印象はどう変わるでしょうか。

金亀子闇の深さへ擲ちけり

この形だと、こがねむしを放り投げたという行為に句の中心が移ることになります。「闇の深さ」は初めから作者の認識の中にあったことになってしまうでしょう。虚子の感動は、「闇の深さ」の発見にあるわけですから、これでは句の内容が大きく変わってしまうことになります。

（佐藤郁良『俳句を楽しむ』岩波書店　による）

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) Bの句に含(ふく)まれる季語を書きぬきなさい。

〔　　　　〕

(2) Bの句に含まれる切字を書きぬきなさい。

〔　　　　〕

(3) 「一物仕立て」とはどのような句のことか。本文中から十二字で書きぬきなさい。

(4) Bの句における作者の感動の中心は何か。適当なものを選びなさい。

ア　夏の夜、灯りを目がけて家の中に飛び込(こ)み、捕まえられてしまったこがねむしの姿。

イ　夏の夜の闇に向かって、捕まえたこがねむしを放り投げようとする作者の動き。

ウ　放り投げたこがねむしが音もなく消えていったことで気付いた、夏の夜の闇の深さ。

〔　　　　〕